

# 第6回平和市長会議被爆60周年記念総会 市民との対話集会

2020年の核兵器廃絶に向け、私たちは何をすべきか

2005年8月5日(金) 18:30~21:00

広島国際会議場ヒマワリ

チェアパーソン 嘉指信雄(神戸大学教授)

発 言 者 アンドレ・バラグリオリ(バニョレ副市長・フランス)  
アンドレ・ヘディガー(ジュネーブ市長・スイス)  
スチュワート・ケンプ(マンチェスター市首席政務官・イギリス)  
スティーブ・フリードキン(パークレー市平和と正義委員会委員長・アメリカ)  
ラウル・コロ(モンテンルパ市議会議員・フィリピン)  
デルフィン・ブリヤン(ボビニー市議会議員・フランス)  
ディピアツア・ピエールルイジ(バルドゥッチ支援センター代表・イタリア)  
ボジダル・スタニッチ(ボスニア難民・イタリア)  
新本ひとし(アジア太平洋フォーラム広島支部・日本)  
土井律紀(生活協同組合・日本)  
阿波明子(ワールド・フレンドシップセンター・日本)  
藤原(NO DU(劣化ウラン弾禁止)ヒロシマ・プロジェクト・日本)  
スティーブン・リーパー(平和市長会議事務局アメリカ代表・アメリカ)  
スーザン・ウォーカー(人道問題・軍縮コンサルタント、元地雷禁止国際  
キャンペーン計画担当役員・アメリカ)  
シャンタル・ボービック(ヴァル・ドマルヌ県議会議員・フランス)  
ジョアンナ・ウィンチェスター(国連国際交流協調委員会・アメリカ)  
塚田晋一郎(ピースデポ・日本)  
荒川好満(海洋動物研究所・日本)  
木村修(パークレー市(アメリカ)随員・日本)

**財団法人広島平和文化センター理事長 齊藤忠臣：**

皆さん、こんばんは。広島平和文化センター理事長の齊藤でございます。活発な発言が続き、全体会議、分科会の終了時間が延びた関係で、この集会も30分遅れのスタートとなりました。ご了承ください。

さて、平和市長会議は、核兵器禁止条約の成立によって、2020年に核兵器を廃絶することを目標とした「核兵器廃絶のための緊急行動」に取り組んでおります。残念ながら、今年5月のNPT再検討会議は、成果を見ぬまま幕を閉じ、核兵器廃絶を目指す中心的な国際合意のNPT体制は、極めて危機的な状況を迎えております。

このため、第6回平和市長会議被爆60周年記念総会は、NPT再検討会議のこの結果を受け、核兵器禁止条約の成立に向け、どのような取り組みをしたらよいかを検討するために開いております。この「市民との対話集会」も、2020年の核兵器廃絶に向けて、市民の視点から何をすればよいか、何をすべきなのかということを議論していただきたい。総会参加者とそして市民の皆さんとの交流も、また期待しております。活発なご意見あるいはご発言を期待するところです。

それでは、チェアパーソンの神戸大学文学部教授、嘉指先生をご紹介します。嘉指信雄教授は、東京外国語大学を卒業なさった後、エール大学で哲学博士号を取得なさいました。ご専門は、現代哲学、近代日本思想史で、広島市立大学の助教授などを経て、2001年から神戸大学の教授を務めておられます。平和関係の社会的活動では、広島平和研究所設立準備委員会委員、広島平和文化センター専門委員などを歴任され、現在は、「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」運営委員、「NO DU（劣化ウラン弾禁止）ヒロシマ・プロジェクト」代表を務めておられます。

それでは嘉指先生、よろしくお願い申し上げます。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

皆さん、こんばんは。齊藤理事長、どうもありがとうございました。広島なので、日本語でやったほうがいいようにも思うのですが、この会の国際的な性格ということで、基本的に英語で同時通訳という形でするので、英語で司会をさせていただきます。

この平和市長会議は、色々な理由でユニークだと思います。その理由の一つは、この平和市長会議というのは、いわゆる自治体のレベルから発し、国際的な政治に影響を与えるという目的を持っているということです。そして、私たちに影響を及ぼす地球の将来を担うことがユニークな特徴だと思います。

しかし、大きなギャップが存在します。つまり、世界の人々の核兵器廃絶に対する願いと国際

政治の現実の間には大きなギャップがあります。ロウチ元上院議員が数字を紹介してくださいました。これは世論調査に基づくもので、世界的に87%の人々は、核兵器廃絶に賛成です。アメリカでも数字がかなり大きくなっており、76%のアメリカ国民が核兵器廃絶に賛成だということです。

この大きなギャップ、つまり、人々の願いと国際政治との間のギャップの存在を、NPT再検討会議に参加した時に強く感じました。また、「NO DU（劣化ウラン弾禁止）ヒロシマ・プロジェクト」の場においても、それを痛感しております。したがって、この平和市長会議というのは、非常に重要な、また緊急を要する役割を担っていると思います。つまり、人々の願いと、そして実際に国際的な政治の場で起こっていることのギャップを狭めるという使命です。

世界各地の市長、そして広島、また日本の国民・市民との交流も、非常に重要な意味を持っていると思います。これは非常に特徴のある機会だと思います。つまり、地方自治体のリーダーが、核兵器廃絶のために動いていること、そして広島市民、日本国民がそれに協力することはユニークな努力だと思います。平和市長会議というのは、市民のサポートなくして成り立たないわけです。私からの紹介は以上にさせていただきます。

それでは、実際に市民と平和市長会議の市長の方々との交流の会議を始めたいと思います。外国の代表の方々にそれぞれの見解をご紹介していただきたいと思います。この集会の進め方ですが、まず、8人の代表の方からのプレゼンテーションを伺いたいと思います。フランス・バニョレ副市長、スイス・ジュネーブ市長、イギリス・マンチェスター首席政務官、インド・バーラーナシー市長、スリランカ・ハンバントータ市長、アメリカ・パークレー市平和と正義委員会委員長、フィリピン・モンテンプル市議会議員、フランス・ボビニー市議会議員の方々からの発表がございます。

他に何かここで発言を予定されている方で、私が述べなかつた方がいらっしゃいましたら、教えていただきたいと思います。少し発言者のメンバーが混乱しておりますので、もしどなたか抜けていた場合、おっしゃっていただきたいと思います。また、イタリアの代表の方が発言したいということで、最後に発言していただきたいと思います。

この最初の、平和市長会議の代表の方の発言は1時間以内に終えまして、残りの1時間は、私たちの間における交流の場にしたいと思っております。こういった進め方でやっていきたいと思っております。

それでは、最初に、フランス・バニョレ副市長の方をお願いしたいと思います。アンドレ・バラグリオリさんでいらっしゃいます。こちらにいらしていただけますか。

**アンドレ・バラグリオリ（バニョレ市副市長・フランス）：**

こんにちは。どうもありがとうございます。秋葉市長、議員の皆様、参加者の皆様、「いつもの言葉で、愛情のこもった動作で、恐れと飢えをもって、そして弱者も強者も、同じ考えの人たちと一緒にたとえわずかでも一緒にやれば、もしかして明日に平和はやって来るかもしれない」というのは、ジョルジュ・ムスタキの「ヒロシマ」という歌の一節です。これは私たちの抱いている疑問の答えになっているのではないのでしょうか。

核兵器の廃絶というのは、一部の人にとっては非常に大きな崇高な目標です。一部の人にとってはユートピア、あるいは世界の安全のためには、とても譲ることができないものだということもありますが、しかしながら、私たちは、これは現実的な目標であると考えています。

核廃絶というのは、平和の文化の発展と一緒に進められるべきものです。私が代表しておりますバニョレというのは、平和の文化を促進しています。特に、様々な外国の都市との姉妹提携を通じて行っております。一つは、ドイツのオラニエンブルクという都市、それからレバノンにありますシャティーラというところで、ここでは、男女の区別なく、あるいは子ども、年寄りの区別なく大虐殺が行われたところです。

私たちがどうしてこの姉妹都市提携ということを追求しているかといいますと、シャティーラについて言いますと、これは、パレスチナ難民との連帯、それから市民・議員、そして様々な団体の間の協力、もちろん三つめの目標は平和です。平和というのは、私たちの最終的な目標です。

シャティーラの問題ですが、平和の問題というのは、中東に起こっていることに対する問題だけではなく、私たちの都市の問題でもあります。というのは、ユダヤ人、あるいはイスラム教の青年に対しての暴力が非常に多いからです。私たちは、レバノンの都市シャティーラとの姉妹都市提携を通じて、こういった暴力をなくしていきたいと考えております。

オラニエンブルクとの姉妹都市提携ですが、私たちは色々な共同の取り組みをしてきました。特に、イラク戦争に反対して、市長の共同声明というものも発表しております。また、ザクセンハウゼンで行われた戦争、ヨーロッパ解放の式典には、私たちの市から100名が参加しております。

被爆者の方が高齢化で亡くなられていると聞きますが、私たちもこういった人たちがいなくなり、そして過去の記憶が伝えられなくなることを、できるだけ食い止めようとしております。そして、特にドイツの都市の市民に対しては、私たちには三つの仏独戦争がありましたが、それでも仲良くできるのだということを、姉妹都市提携で追求していきたいと思っております。

戦争の生存者というのは、広島に被爆者あるいはエージェント・オレンジ（ベトナム戦争中にアメリカ軍が散布した枯葉剤）の生存者、あるいはイラク戦争の劣化ウラン弾の生存者のような、

2世、3世というものがあるわけです。できるだけこういった過去の記憶を忘れないという努力が必要なのではないのでしょうか。

ノーベル賞を受賞された作家の大江健三郎によると、過去の犠牲の思い出は、現在を人間化させる私たちの助けになると言っていました。

私たちは、それに加えて、人種差別などが戦争を引き起こし、ひいては核による破壊をもたらすということを言い続けています。私たちは、住民に対し、この平和の目標、そして核廃絶の目標を追求するように働きかけていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

一つ言っておきたいのですが、アンドレ・バラグリオリ氏が非常に短い時間で、5分以内でスピーチを終えてくださいました。同じように、彼に見習って、短い時間でスピーチを終えてください。では、ジュネーブ市長、スイスから来られているアンドレ・ヘディガー氏をこの壇上にお呼びしたいと思います。

**アンドレ・ヘディガー（ジュネーブ市長・スイス）：**

皆様、特に広島の方々の皆様、まず申し上げたいと思いますのは、私どものジュネーブが、いかに闘っているかということです。スイスという国は、700年の歴史を持っておりまして、そして、その700年間、外国との戦争をしたことがありません。他の国で戦争をしても、スイス連邦を作るときには内紛がありましたし、宗教戦争もありましたが、外国との戦争はしておりません。ですから、戦争という意味では、我々は他の国のような動的な、ダイナミックな動きをしていないのです。

ジュネーブというのは、人道的な人権の国です。皆さん、色々な国際機関がスイスにあるということをご存じでしょう。国連もありますし、WHOもありますし、色々な国際機関があります。それから赤十字があります。こういった国際機関というのは、広島の方々にとって重要な要素だと思います。

まず、この赤十字のマルセル・ジュノー医師が、まずは船で、そしてまた飛行機で、色々な薬・医療品を、広島の前爆の日の後、すぐ持ってきたわけです。そして9月には、我々は広島のためのイベントをすることになっています。また、本も出ることになっています。皆さんもぜひ、ジュネーブにいらしていただきたいと思っております。

ジュネーブというのは、本当にこの人間性の、人々を受け入れる、そして平和を謳う国です。そして、2年前の国勢調査の時にわかったわけですが、スイスには130の色々な違う国の人々

がいるわけです。国際機関を別にして、色々な130の国の人たちがスイスに住んでいるわけです。ですから、ヨーロッパの全ての国々からも来ておりますし、政治的な色々なことがあろうと、色々な国からスイスに住んでいる人がたくさんあるわけです。ですから、我々は民族的なものに対しては非常に尊重しております。

いくつかの学校では、40または50の違った国の子どもたちが教育を受けているわけです。ですから、そういった意味では、教育機関というものは大変だと思います。50の国が違う、50の文化の違う、50の言葉の違う子どもたちが一緒にいるわけです。もちろん、食文化も違う子どもたちです。ですから、いわゆるマルチ・カルチャー、多文化の国がジュネーブだと思います。これが数世紀続いてきているわけです。東から西、北から南というところから人が来るわけです。アルメニアからも人が来ております。

ヨーロッパでは色々な現象がありましたが、ヨーロッパにはファシズムがあった時代もあります。スペインやポルトガル、ギリシャの将軍にもファシズムがありました。そういったときに弾圧に遭った人たちは、スイスに逃げてきたわけです。我々は、彼らを受け入れ、そして仕事を見つけてあげました。我々としては、色々な意味で、そういったスペイン人がいるからといって、ブロックを造って閉鎖をしたりということは一切しておりません。ですから、ジュネーブにいる人たちは、仲良く一緒に住んでいるわけです。ですから、これは「ジュネーブ人」ということで、我々としては対応しておりました。何を言いたいかといいますと、我々としては、平和文化がジュネーブにはあるということを申し上げたかったわけです。

私どもは、「広島・長崎アピール」に賛同しています。これは最初に行われた基調講演の時のアピールでした。それから、国連の平和アピールにも我々は応じております。どのようにしたら平和を作れるかということです。我々は、平和文化・平和教育をしております。ですから、これを教育の中にも取り入れております。それと同時に、ジュネーブに平和学校もあり、色々な先生がいて、いろいろ教育をして、平和のために、子どもたちに何が平和かを学ばせるための先生への教育もしております。

我々としては、かなりの予算をこの教育と協力に使っております。そして、他の国との協力は非常に重要だと思います。ですから、我々は途上国にも、またアフリカ、ラテンアメリカ、または東ヨーロッパの人たちに対しての協力もしておりますし、消防署員の育成、色々なローカルな手工芸の人たちに対する援助もしております。

私どもは、こういった途上国の国々を助けなければいけないからという決心があるからです。飢えにあえいでいる人たちに対しても、色々な活動を取っております。世界各国のそういった困った人たちに、協力しております。

去年、「ジュネーブ・アピール」を出しました。これは、ユダヤ人とパレスナ人がうまくいくようにという形でのアピールです。そして、私どもは今こそ我々が努力をして、このパレスチナとイスラエルがきちんとした形で合意に達するような形で、話し合いをするという場を設けたいということでのアピールです。

これは数年前ですが、二つの民族が対立しているモロッコのサラヴィでもこのような形でのアピールを出し、彼らに対しても協議をするようにという呼びかけをしました。

ジュネーブは平和のために、国連とともに国々との協力のために努力をしています。これが私がお話したかったことです。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ユニークなスイスの歴史、そして様々な民族がいらっしゃるという状況についてご説明していただきました。私たちが非常に勇気づけられたと思いますし、またもっともっとお話を伺いたいのですが、この会議自体が多文化ですので、なるべく多くの方々との交流を図りたいということで、次に進めさせていただきたいと思います。

次の方ですが、イギリス・マンチェスター市首席政務官でいらっしゃいますスチュワート・ケンプさん、お願いします。

**スチュワート・ケンプ（マンチェスター市首席政務官・イギリス）：**

ありがとうございます。今日は、この会合でお話をさせていただく機会が与えられまして、非常にうれしく思っております。アフザル・カーンという市長がこの場でお話をさせていただきかけたのですが、所用のために、彼の代わりに発言させていただきたいと思います。通訳の方に、前もって原稿をお渡ししておりませんので、できるだけゆっくり話したいと思いますが、同時に、できるだけ簡潔に時間以内に終わりたいと思っております。

簡潔にするためには、いくつかの課題のいわゆるヘッドラインをご紹介させていただきたいと思います。そして、この発言の後に、その議題に基づいて皆様との交流を図りたいと思っております。

第一に、マンチェスターというのは多岐多様にわたる市であり、イスラムの人たちもいますし、アフザル市長もイスラムです。そして、ユダヤ教の人たちもいます。実際、首席事務官もユダヤ人でいらっしゃいます。また、中国の方々もいらっしゃいます。多くの中国人の方々も、この地方自治体でも仕事をしております。

また、その他の様々な国民や民族の人たちがいます。アフリカ系あるいはカリブ系の方々もい

らっしゃいます。今では、いわゆるブラック・ブリティッシュのコミュニティとなっているわけですが、私たちイギリス人もいるわけです。

様々な政策がありますが、その中でも核兵器廃絶という動きが市民の中であります。今年の活動ですが、市長から先ほども紹介がありました、市議会は貢献をしたいと思っている。つまり、社会的な正義、そして優れた市民、そして人々、文化、信仰の平和を促進していきたい。そして、市議会は人々と協力していくと。そして、様々な信念を持った組織、その他の地方自治体、政府機関、国際機関と協力して、安全、そして発展を行っていきたい。この多岐多様なコミュニティの発展に貢献したいと。そして、その家族の発展に協力していきたいとあります。

パキスタン、インドの間のカシミールに緊張が存在する中で、これが発展して核兵器の危機につながる可能性がある中で、また、その緊張が波及し、それが世界に放射し、そしてマンチェスターにも影響が及び、また、そのコミュニティの中で緊張が高まる可能性がある中で、対立を生み出す可能性があります。イスラエルやパレスチナとの間の緊張・対立もある中で、こういった緊張を緩和させていくということに私たちは貢献していきたいわけです。

したがって、私たちはこういった必要性に対して意識を持っているということです。コミュニティだけではなく、国内において、また国際的な平和のために、我々は貢献していきたいと述べているわけです。

広島・長崎被爆60周年記念ですが、我が市のイニシアティブの一つとして、映画館で「核」というものをテーマにして、様々な映画が上映されております。「Project and Survive (映写して、そして生き残ろう)」という副題があるわけですが、1980年代において、政府は核戦争がヨーロッパ大陸に起こったとしても、私たちは生き延びることができるというキャンペーンを行いました。1980年代においては、それが大きな可能性だと思われていたわけです。「Protect and Survive (保護し、そして生き残ろう)」というキャンペーンだったわけですが、今回は、映像を通して、そして「我々は生き残ろう」という副題のもとで、こういった映画館で核をテーマにした映画が上映されているわけです。

広島では、この核という問題は、最大の重要な問題ですし、また、他の都市においても、それが言えると思うのですが、この問題というのは、優先順位としては、その他の国々においては、必ずしもそれほど高い優先順位ではない場合もあるわけです。英国における核のスタンスがあるわけですが、それによって、国民は様々な意見を持っているわけです。

さらに色々な課題があつて、もっと申し上げたいのですが、時間が限られておりますので、ここで終わりたいと思います。マンチェスターの政策に関して、あるいは地方自治体として、国のレベル、あるいは国際的な活動について、何かご質問があったら、後ほどお受けしたいと思います。



す。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。非常に具体的で、また勇気づけられるような例をお話しいただきました。本当に時間があれば、もっと具体的な例をマンチェスターからお聞きしたかったと思います。

では、バーラーナシー市長のアシスタントでありますヴィレンドラ・プラタップ・シン・ガタム様、インドからお越しですが、壇上にお越しく下さい。おられないでしょうか。おられないようですね。では、すみません、大学生の時に、インドに最初に行ったのです。その時にガタムさんと会ったのですが、後でまた来られるかもしれません。広島市の職員の方、ちょっとガタム氏を捜してみてもらえますか。

では、スリランカ・ハンバントータ市長であります、ダスン・アラチチャイジ・ガミニさん、ちょっと発音がおかしいかもしれませんが、おられますか。スリランカから来られた市長の方、おられますか。おられない。分かりました。

では、時間に対して、これまでのスピーカーに随分無理をさせてしまってすみませんでした。もしかしたら、後で来られるかもしれませんが、飛ばしまして、アメリカ・バークレー市平和と正義委員会委員長のスティーブ・フリードキンさんに登場願いたいと思います。

**バークレー市平和と正義委員会委員長 スティーブ・フリードキン（アメリカ）：**

皆さん、こんにちは。広島市の皆さん、こんにちは。私は、バークレー市の平和と正義委員会の委員長です。ここに来ることができてうれしく思っております。そして、皆さんの尽力に対して感謝申し上げたいと思います。原爆の被害がありました。皆さんの努力のおかげで、繰り返されることはありませんでした。ありがとうございました。

バークレー市は、広島の皆さんとともにあります。8月6日の8時15分、そして8月9日11時2分に、原爆の記憶とともに平和のベルを鳴らしております。これは、広島の被爆者の方が5月に来られて要請されたことに対して、行っているものです。また、今回で4回目になりますが、この広島のイベントにちなんで、灯ろう流しもやっております。

そして、バークレー市では、選挙民が法を制定できることになっております。我々は、「バークレー非核法」というものを、法律として出しました。そして、バークレー市は、核兵器を造っている組織とは全く取引をしないことを決めました。

バークレー市にはカリフォルニア大学というものがありますが、アメリカ政府の三つの核研究

所を運営しております。ですから、できるだけこのカリフォルニア大学とは、やりとりをしないようにしています。もちろん、この市の中でいちばん大きな施設がカリフォルニア大学ですのでなかなか難しいわけですが、できる限り避けているという状況です。

そして、この「バークレー非核法」は、一つのよい例です。すなわち、地域が核兵器を造っている産業から、支援を差し引きましょう、やめましょうということに対して、直接の行動を起こした良い例です。こういったことは、もしうまくいけば、南アフリカでアパルトヘイトの制度がなくなったように、非常に力を持つように思います。

今、我々は都市としてアクションを起こす時期に来ております。例えば、HOYAというガラスの会社が日本にありますが、彼らは、核兵器を造るレーザー機器のガラスを造っています。広島は、このHOYAからガラスを買っていないでしょうか。こういった会社からの取引をボイコットするべきではないでしょうか。このような核兵器に絡んでいるような組織とのやりとりを、全てやめるべきだと思います。我々は、この「バークレー非核法」のもと、そういった組織のリストを作りました。よければ提供いたします。

我々は、広島と長崎の被爆者の和解の精神から多くを学んでおります。我々のこの運動というのは、癒しを進めるものです。戦いではないのです。勝者と負ける人が出るようなものではありません。我々はピース・メーカーでありたいと思っております。

今日ここでお話をしてくださいと言われて、とてもうれしかったです。しかし、何かおかしいと思いました。というのも、皆さんから学ぶことのほうが多いからです。私が話せることより、学ぶことのほうが多いと思います。

ですから、最後に一つだけ申し上げて、スピーチをやめたいと思います。皆さんに耳を傾けたいと思います。最後に申し上げたかったのは、「ありがとうございました」ということです。

#### **チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございます。私たちに対する非常に挑戦的な課題を提供してくださいました。

次のご発言者でいらっしゃいますが、フィリピンのモンテンルパ市議会議員、ラウル・コロさん、よろしく願いいたします。

#### **モンテンルパ市議会議員 ラウル・コロ（フィリピン）：**

どうもありがとうございます。皆様、こんばんは。秋葉市長、そしてご参会の市長の皆様方、そして様々な組織のメンバーの方々、また広島市民の方々、私は、今日の午後のセッションでは発言を控えました。といいますのも、この市民との対話集会で、ぜひ発言したいと思ったからで

す。分科会Ⅰ、分科会Ⅱで発言したいかと尋ねられた時に、既に複数の発言者がいるので、私は発言したくないと申し上げました。広島市民の方々にお会いしたかったのは、特別なメッセージがあるからなのです。

ご存じのように、フィリピンは日本の帝国軍によって、第二次世界大戦中、占領された土地でした。また、フィリピンでは、第二次世界大戦中の日本による占領によって、様々な苦しみを味わったわけです。私の父は、アメリカ軍の一員であり、極東におりました。そして、彼は何百キロと行進を強制されました。しかし、父は幸運にも奇跡的に生き残りました。

今日は、広島市民の方々に私のメッセージをお伝えしたいと思います。また、日本の国に対してもお伝えしたいのは、私が今夜ここにおりますのは、報復したいからではなく、和解したいからです。私たちは、平和を実現するためには、心の中に憎しみがあっても、実現することはできません。広島市民の方々に対して申し上げたいのは、フィリピン人として、我々は和解をしたいということです。決して報復ではないということです。そして、非常に強い気持ちでもって、核兵器の使用というのは、人間に対して決してなしてはいけないことであると深く信じております。

今夜、私は2020年の核兵器廃絶を目指すことに対して、賛成するという事を申し上げたいと思います。大量破壊兵器というのは、文明社会においては何ら役割を果たすことがないと信じております。

モンテルパ市では、私たちの信念として、知識こそ力であると考えております。昨日の基調講演において、女性の教授によっても明らかにされました。知識こそが力であるということです。地方自治体のレベルにおいて、原子爆弾の悲惨さを十分に認識する必要があります。そういった理解が、一般市民の間において広がることにより、原子力を使ってはいけないという理解を深めることができるわけです。そして、声を大にして、我々とともに、この平和市長会議のメンバーとともに、核廃絶の活動に参加してもらいたいと思います。そして、2020年の核兵器廃絶を実現したいと考えるわけです。

今夜は、皆様とともにこの「市民との対話集会」に参加することができ、幸せに思います。広島市民、また日本国民に対して申し上げたいことは、フィリピンというのは、日本との間において、非常に友好的な関係を持っているということです。私たちは、過去は忘れ、将来、核兵器のない未来のために、ともに協力しなければなりません。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。そして、この「市民との対話集会」で発言することを選んでくださってありがとうございました。また、非常に深い歴史のお話がありました。私たちも、そのこと

を忘れてはいけないと思います。誠実に向き合わなければいけないと思います。そしてまた、希望に満ちた将来志向の、未来志向のお話をありがとうございました。

では、フランス・ボビニー市議会議員であられるデルフィン・ブリヤン様を壇上にお呼びしたいと思います。

#### **ボビニー市議会議員 デルフィン・ブリヤン（フランス）：**

皆様、こんばんは。私は、皆様とお目にかかれることを大変感激しております。広島の方々とお目にかかれて、うれしゅうございます。また後でたくさんお話をしたいと思います。

私は、デルフィン・ブリヤンと申しまして、市議会議員です。私はちょっと原稿を変えました。

ニューヨーク国連本部で開かれたNPT再検討会議は、新たな核軍縮の要求に応えてくれませんでした。このため、核保有国の元首たちは歴史的に重大な責任を負うことになりました。なぜなら、世界から核兵器を廃絶する機会を拒否したことになるからです。

しかしながら、不拡散の国際的体制そのものは存続し、条約の破綻という極めて現実的な危険は避けられました。これはかなりの成果だと思います。私どもの闘いはまだまだ続いております。そして、この核廃絶のためには、まだまだ努力が必要です。

しかしながら、核保有大国は、近い将来に核兵器の廃絶を可能にする具体的な誓約よりも、現状を選んだのです。でも、待っているだけはいけないと思います。色々な国で、もう既に行動が始まっておりますし、フランスは、こういった意味で非常に活発に活動しております。

ボビニー市は、平和の文化を優先的な行動の一つとしているフランス地方自治体の一つです。そして、ボビニー市は、市民の発言、参加的民主主義から、集団的利益運営の新しい方法を生み出しております。そして、数年前から平和教育の実践を進めています。ボビニー市議会は、核不拡散条約を発展させるための努力を支援しております。我々のところには色々な国の人たちもいますし、宗教の異なる民族がたくさんおります。そして、我々としては、それぞれの英知に委ねて、何か新しいものを検出しようとしております。

ということで、我々の議会は、核不拡散条約を発展させるために行われる努力を支援するために、動機を選択しました。そして、9月21日、国連において国際平和デーとされておりますが、子どもたちに「サダコ」という映画を見せる予定になっております。子どもたちは折り紙を折る予定です。彼らはここに来ており、多くの人たちが明日の平和記念式典に出ることになっております。

皆さんご存じだと思いますが、私どもはフランス平和自治体協会に加盟しており、この協会は現在この広島に来ています。そして私たちは、平和に対してどのような闘いをしているか、お伝

えしているのです。

時間を守ったと思います。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

この場に非常に即したご発言をいただきまして、ありがとうございました。

それでは、これから市民の方々と交流をしていただきたいと思います。全ての発言者に発言していただいたわけですが、昨日たまたまイタリアの方と出会いまして、イタリアの方もこの対話集会に参加したかったのだけれども、登録が前もってできなかつたとおっしゃっていました。「別に前もって登録していらっしゃらなくても参加できますよ」と私は申し上げまして、ここでご紹介させていただきたいのが、ディピィアツア・ピエールルイジさんでいらっしゃいます。イタリア・バルドゥチ支援センターからいらっしゃいました。

ピエールルイジさんはイタリア語でお話しになりますので、同行されている山田さんがイタリア語から訳してくださいます。

**バルドゥチ支援センター代表 ディピィアツア・ルイジ（イタリア）：**

皆様にごあいさつを申し上げます。私はイタリアから来ている平和交流団の広島訪問の代表です。私たちの名前は、「バルドゥチ支援センター」という、避難民、政治的亡命者、移民の支援をしている市民活動団体です。バルドゥチという神父の名前をつけた、文化活動、平和活動をしている活動団体です。私たちは、北東イタリアのフリウリ・ベネチア州というところから来ています。

平和の問題は、私たち人間が生きていくうえでの根本的な問題です。そのために、私たちは長い間、広島と長崎を心にしっかりと刻みつけてきました。そういう意味で、私たちは何回か広島証言者、沼田鈴子さんと長崎の証言者を直に招き、証言をしていただきました。

このような活動、対話集会、講演を通して、特に子どもたちも、学校の生徒たちも、直に私たちの支援センターを訪れてきます。この度の広島訪問は、感動を込めて、心からこの式典に参加しております。

原爆は、その殺戮の強力さにおいて歴史的なものであると思います。強圧権力の狂いを表している暴力殺戮の兵器だと考えております。人間の歴史を完全に変えたと思います。今、ここに私たちがいるのは、人類の叫び声をあげるために来ているのだと思います。

広島を繰り返してはならない。長崎を繰り返してはならない。戦争をしてはいけない。武器を取ってはいけない。どこの世界にも起きてはならないことである。世界にある不正義が許されて

はならない。人種差別をしないこと。環境破壊を続けられないこと。これらのことを、個々の人間が責任を持って担うこと。共同体において、市民として、そしてヨーロッパの中においても、世界の各組織においても、国連を新しく作り替えていくこと。政治的な流れを変えなければ、平和の実現はできない。

私たちの力によって、政治、宗教、色々なところで、やることはたくさんあるといえます。重要なことは、ただ「ノー」と言うだけではないといえます。毎日「イエス」と、人間の生に対して、私たちは答えなければいけません。

バルドゥチ神父の墓の上に、こういう深い意味の言葉が書かれています。「未来の人間は、平和の人間でなければ人間ではない」。人間でないという意味は、広島のように人間が破壊されるということです。人間ではないというもう一つの意味は、人間の名に値する尊厳のある人間ではないという意味です。

この原爆慰霊碑には、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という言葉が書いてあります。主語はありませんが、私たち自身が平和の主役であるということ、世界の市民の平和の、地球家族の平和の市民を作ってゆくということです。

#### **バルドゥチ支援センター通訳 山田真喜子（イタリア）：**

ボジダルさんは、私たちのバルドゥチ支援センターに、1992年にユーゴスラビアの避難民として訪れました。そして、そこで支援を受けて、現在もそのズリアーノという町で暮らしております。詩人で、作家でもあり、教師でもあります。その詩人の立場から、一言、皆様にごあいさつしていただきたいと思います。

#### **ボスニア難民 ボジダル・スタニッチ（イタリア）：**

こんばんは。心からごあいさつ申し上げます。私のように戦争を拒否した者から、本を書く者として、戦争は全く無用なものであるということを書き続けている者として、広島の60年前の悲劇について、広島についても語ってききましたが、劣化ウランの爆弾についても私は語っていきたいと思います。核兵器が完全に世界の中で排除されることを願って。どうもありがとうございました。

#### **チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

もっと時間があれば、ポヴェットさん、ブリザールさんにも、もっとお話をいただきましたかったのですが、時間の制約がありますので、簡潔にさせていただきました。ご発言をいただきましてあ

りがとうございました。

今、7時32分です。ちょうど時間どおりということでしょうか。ちょうど1時間、皆様との交流を図りたいと思います。

それでは、広島の方々、広島に限らず、日本の市民、国民の方々に、それぞれのご意見を述べていただきたいと思います。今までなされた発言に対してのご質問、コメントでもけっこうですし、あるいは何か個人的なご意見があれば、それでもけっこうです。

では、何かご発言になりたいかたは挙手願います。どうぞ。

#### **アジア太平洋フォーラム広島市部 新本ひとし（日本）：**

どうもありがとうございます。私は広島で1950年ぐらいに生まれました。戦後です。今のお話の中で、パークレー市の市長さんのお話が私にとって非常に重要で、共感を持ちました。やはり核兵器の根絶は、やはり総論賛成、各論うにやうにやと、総論は核兵器をなくすということで、核兵器は、要するに色々な部品からの集積によってできておりますので、核兵器を造る企業がこれを造ることにいくら利益を出しているか、あるいはそういうことをやはり公表して、核兵器のそういう軍需産業のバランスシートを見ながら、徐々にその兵器産業を少なくしていくことが非常に重要ではなかろうかと思えます。

だから、今後、やはり核兵器にまつわる企業の発表を進めていくことが非常に大事ではないかと思えます。今後とも、そういう方向にも目を向けていただきたいと思えます。

ここで、平和に対する件に関して、日本は残念ながら第二次世界大戦がどのような形で戦争をしていったかということについて、何ら反省もしていない状態です。ここにおいて、日本国における憲法9条が、やはり世界的に大事な条項であるということなので、もっとやはり日本においても、日本の学者たちも世界の学者たちも、憲法9条並びになぜ日本が第二次世界大戦の事情に巻き込まれていったかについての研究を、先生方をお願いしたい。

最後に、広島市といえば平和な都市と言われていますが、広島市といえば軍事都市です。明治から、約100年前から、広島は軍事都市であるがために、アジア侵略の戦略基地でした。東は東京が大本営であり、西は広島が大本営です。明治天皇も3年間広島に住まわれておられ、国会が広島に3年間あったということも事実です。決して広島は平和都市とは言えません。平和都市の前は、アジア侵略のための軍事都市であったということ、この場で皆さんよく知っておいてください。広島の土地は軍に関する土地の施設がたくさんありました。だから、原子爆弾を落とすことになったのだらうと思えます。以上です。長々とすみませんでした。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。質問ということではなかったですが、非常に前向きな、フリードキンさんがなされた発言に対する反応ということでした。フリードキンさん、今の新本さんの発言に対して、何か追加でコメントすることはありますか。フリードキンさんのプレゼンテーションは短かったですから。

**パークレー市平和と正義委員会委員長 スティーブ・フリードキン（アメリカ）：**

「ありがとうございました」と言いたいと思います。新本さんのコメントを聞いて、とても光栄に思いました。そして、一緒に協力をしたいと思います。また、他の方も一緒にこういったアプローチに協力をしてください。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。他に発言をされたい方はいますか。今おっしゃったことに対する反応、もしくは他の質問でもけっこうです。どうぞ。お名前と、もしグループに所属されていたら。

**生活協同組合 土井律紀（日本）：**

私は生活協同組合の土井と申します。生活協同組合というのは、安心して安全な暮らしができるように、いろいろ食品・商品を会員の方に供給をしている組織ですが、安全で安心な暮らしができる前提は、戦争も飢餓もない平和な社会でなければならないということで、暮らしにかかわる問題の一つとして、平和の取り組みをこの間ずっと続けています。

私ども生活協同組合は、日本の法律で一つの都道府県の枠を超えて事業や活動をできないことになっていますが、現在、会員の方が33万になっています。そういう中で、この間、私どもが取り組んできた平和の取り組みについて、少し発言をさせていただけたらと思います。

最初に、平和市長会議が提唱している核兵器廃絶のための緊急行動「2020ビジョン」について、今年の1月にも県内の生協の連合会で、秋葉市長においでいただいて講演いただきました。今日も、提唱されている趣旨に、県内の生協をはじめとして、日本の生協が賛同して、是非2020年までに核兵器をなくすように取り組みを進めていこうということを、全国の生協の代表1,200名ほど集まって意思統一をしたところです。

私どもは大きな活動はできません。会員の大半は女性、母親の方が会員になっていますが、母親の方は、子どもたちを、また孫たちを、二度と60年前の悲惨な状況に遭わせてはいけな



いう思いで、本当に一人一人の力は少ないわけですが、みんなが小さなことからでも寄せ集めれば、大きな世論を作っていくことができるということで取り組みをしています。

その主な中身は、60年経った現在、戦争体験というものが風化をする中で、戦争体験を、また被爆の体験をやはり後世に継承していくことが必要だということで、今日も被爆者の方の証言を聞いたところです。全国各地の生協でも、私どもの生協でも、ずっとこの間、機会あるごとに被爆者の方をお呼びして、体験を聞いています。それを口コミで皆さん方に、子どもさんにも広めて、このことを忘れることが、核戦争を再発させることにもつながるのだということで、そういう風化させない取り組みを現在しています。

また、毎年私どもは日本政府に対して、核兵器廃絶条約を急いで作っていただきたいということで、署名活動に取り組み、今年も3万余りの署名を国会に持って行って請願をしています。なかなか、私どもの声が国の政治の場には届かないということですが、届くまで続けようということで、毎年取り組みをしています。

また、この建物のある平和公園の中にも、原爆犠牲者の慰霊碑がたくさんあります。そういう慰霊碑を回って、どうしてこういう慰霊碑が作られたのかということ、修学旅行に来られた方、また私どもの会員の方に知っていただく。そういう取り組みも現在続けていますし、そういう碑を案内するガイドの組織も、私どもで作って取り組みを進めているのが現在の状況です。

また、今年5月にありましたNPT再検討会議にも代表2名を送りまして、私たちの声を国連にも届けたい、各国に届けたいという活動を進めています。是非、そういう点では、私どもも日本政府に要求しますが、世界中の市長の皆さんが、それぞれの政府にもどんどん核兵器廃絶条約を締結するように、働きかけを強めていただきたいと思います。以上です。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

秋葉市長やそのスタッフ、また平和市長会議のスタッフ、メンバーが喜ぶようなご発言をいただきまして、ありがとうございました。皆様、今のご発言を伺ったら喜ばれたと思います。

もう既に発言をなさった方で、何か他に市民の方々の発言に対して、発言したい方、ご返答なさりたい方がいらっしゃいましたら、また手を挙げてご発言いただきたいと思います。色々な重要なポイントも出てくると思いますので、今までの市民の発言に対して、何か発言なさりたい方はいらっしゃいますか。

**ワールド・フレンドシップセンター 阿波明子（日本）：**

阿波明子と申します。ワールド・フрендシップセンターというところに属しています。それで、何か戦争体験が風化して行って、子どもたちにそれを継承しなければいけないと。とても疑問に感じます。というのは、イラク戦争が今起きている。世界中で、これだけ戦争がいっぱいあるのに、どうして子どもたちがそれを見ないで済ませられるかということが、私は疑問に思います。

テレビでもインターネットでも、これだけ世界中で戦争がボンボン起きていることを子どもに見させないで、ただ60年前のことだけを伝えていくということに、非常に疑問を感じまして、そこをどう思っているのか。他の日本人の方でもいいですけども、答えていただきたいと思います。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

では、どなたかお答えいただきたいと思いますが。

**NO DU（劣化ウラン弾禁止）ヒロシマ・プロジェクト 藤原（日本）：**

藤原といいます。広島「NO DUヒロシマ・プロジェクト」というNGOで、あちらにブースを出しておりますので、また覗いてみてください。

今の、今起きている戦争についても、やはり目を開かなければいけないと本当に思います。今、私たちは劣化ウランの問題をやっているのですが、やはり今のイラクでも大量の劣化ウランが使われていて、でも、実はイラクだけではなく、コソボやボスニア・ヘルツェゴビナというようなところで使われて、非常に被害が出ているのです。けれども、その被害の実態が、全然メディアに載ってこないという問題がすごくあるのです。

先ほどボスニアの方ですか、お話しいただいて、もう少し被害の実態をご存じでしたら、お話をさせていただきたいと思います。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうでしょう。非常に具体的な要請が今ありました。よろしいですか。そこでちょっと立っていただきまして。

**ボスニア難民 ボジダル・スタニッチ（イタリア）：**

1995年にボスニアの戦争が終わった時です。コソボの内戦に対する介入は1999年だったわけです。その時に、非常に大量の劣化ウランの爆弾が使われたわけです。その結果は非常に

悲惨なものです。多くの癌の影響が市民の中に出てきて、特に白血病の原因が多いのです。自然と人間、生きるもの全てが被害を受けたということです。ボスニアに1日いることによって、世界中の人が1年間に受ける放射能と同量であるということです。正確な統計は完全に出ているとはいえません。それはやはり政府の政治的な理由によると思います。

まず、ちょっとだけ簡単にお話しします。ボスニアの北のある小さな町では、1～10歳までの年齢の子どもたちの間に、15の複雑な癌の病気が発生しています。ある町は、5,000人の人口なのですが、ここ10年間に500人の人が亡くなりました。3分の2は完全に癌だという結果が出ています。

私は、この兵器が廃絶の運動によって全て廃絶できると確信しています。具体的な利口な頭を必要とするわけではありません。哲学者パスカルが言っているように、心の理由を聞く。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。個人的にはもっとお聞きしたいです。というのも、この劣化ウランという問題に私も関わっておりますので、また後ほど詳しく聞きたいと思います。しかし、それは少し本題から離れてしまいますので、この平和市長会議の本題に戻しましょう。

スティーブ・リーパーさん、彼はこの平和市長会議のために大変ご尽力してくださっていますので、何か言いたいことはありますか。また、スタッフとして、この「市民との対話集会」の発言者のリストに彼の名もありました。

**平和市長会議事務局アメリカ代表 スティーブン・リーパー（アメリカ）：**

非常に根本的な質問です。今我々はキャンペーンをやっています。今世界は動いているように見えます。第一次世界大戦と第二次世界大戦の間にあったような動きに、またなっているわけです。富める者と持たない者、貧困者と富裕層のギャップが非常に広がっており、また、搾取されている人の怒りも強まっております。

アメリカでは、政府がその怒りを使うことに走っています。その怒りを利用して、政治に使っているわけです。この怒りというのは、平和運動家のところにも持ち込まれております。平和運動に携わる人も、お互いに怒りを持っているのです。ブッシュ政権にも怒りを持っています。そして憎みをあらわにしてしまうわけです。平和に関わる人でもそういった怒りをあらわにしております。

市長や皆さんはこの中で、その怒りに対して非常に上手に対処していると思います。その感情

を非常にうまく管理しておられると思います。彼がおっしゃったとおり、心の声を聞かなければいけないのです。心の理由を聞かなければいけないのです。怒っている人々に、どうやって影響を与えていくのか、その怒りをどのように変えていくのか、そしてそれを前向きな方向に、愛に、そして平和に、そしてまた共生、寛容、協力、そういった平和の文化にどうやって変えていくことができるのでしょうか。

これはとても重要なステップです。まだそれに対して明確な答えがありません。皆さんからの答えを聞きたいと思います。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。非常に重要で、また根元的な質問だったと思います。これは、直接、我々に向けられた質問だと思います。市長が平和文化を作ろうと、その力を結集しようという話がありましたので、今の発言に対して、具体的に発言ができる市長の方、おられますか。遠慮しないで発言してください。また、特に最初のほうで発言に上がってくださった方で、もう少し付け加えたい方がおられましたら、どうぞなさってください。

**発言者不明：**

私は市長ではありませんが、広島の実験者です。先ほどから、風化の問題であるとか話が出ましたが、私は皆さんに大変期待をしております。私は1945年、6歳でした。1.3kmのところで、あのキラキラ輝いた飛行機を見ておりました。私たち被爆者は、同じ苦しみを、世界中のどこの人にも味わってほしくない。先ほど、「過ちは繰返しませぬから」という言葉があつて、主語がないけれども、それは私たち人間というふうに説明されたし、秋葉市長が、「報復ではなく和解を」と呼びかけられています。私もそうだと思います。

今日、同じような1.4kmのところで被爆した姉が、大阪からやってきました。70歳です。「来年の私はないかもしれない。今年の暑さは随分身にこたえる。来年のこの8月6日は健康に迎えられないかもしれない」と言って、急ぎよ大阪からやってきました。その言葉は、私は大変ずっしりと胸に来ました。

私は、病気は10年位前に、癌ではありませんが、甲状腺の異常で、歩くことも、声も、髪の毛も全てではないのですがなくなって、声が全然出なくなって、このように立っていることもできませんでした。もちろんその甲状腺低下症というのは、被爆者だけに表れる問題ではありません。けれども、厚生省は、被爆の影響であろうと判断をしました。

私は、核兵器はどんな国にも落とされてはいけない。どんなところにも使用されてはいけない

と思います。私たちと同じ苦しみを、どんな地球上でも使われてほしくありません。それは核兵器の廃絶しかありません。核兵器というのは、劣化ウラン弾も全て含まれます。あのイラクで、先ほど聞いたボスニアでも、影響を受けるのは女性や子どもです。特に小さな子どもです。イラクのあの惨状を見てください。薬もなく、そして次々と死んでいくあの子どもたち。あの惨状を見ると、胸が痛くなります。どうして地球上の中で、それを助けることができないのかと思って、苦しいです。

風化されてはいません、私たち被爆者の胸は。ごめんなさい。姉も行方不明のままです。臨月を迎えた叔母も身動きできない所で、500mの所で、船のすぐそばに小さな骨があって、お腹の中の赤ちゃんの骨だと認められたそうです。連れて帰った姉は、背中にうじ虫がわいて、そしてそのうじ虫を取ると、横にあるうじ虫が動いて、そしてそれが神経の生きている肉の奥のほうへ入り込んで、随分痛がって、同じ年の8月16日に亡くなりました。その姉はまだ連れて帰ったからよかったのですが、もう一人の姉は行方不明のままです。

私は、命を与えられたと思っています。だからこそ、今日ここに来ました。そして、世界中の素晴らしい考え方を持っておられる市長さんに、そしてニューヨークで一緒に歩いた市長さんに、ぜひ世界中から核兵器をなくす運動を、早く、被爆者が生きている間に、そして世界中の人たちが安心して生活できるように、私たちは作らなければいけないと思っています。

きれいな地球を若い世代に渡してあげたいと思います。絶対に風化はしていません。確かに年は取りましたが、風化はしていません。そのことを胸に刻んでいます。私たち被爆者は、色々な所に、もしお呼びがかかれば、こういう話でもし有効であれば、いくらでも健康が許す限り出かけます。私は、ありがたいことに甲状腺の低下症であっても、薬があって、その薬を飲んでいけば、声も出るようになりました。こうして立っていることもできるようになりました。髪の毛も少し生えるようになりました。だから、薬さえ持って行けば、どこへでも行ってこうして話ができます。もし、被爆者が行って話をすることが有効であれば、どこへでも出かけていきます。だから、どうか地球上から核兵器をなくす動きを、一つでも早く、一日でも早く、そういう動きを形成していきたい、いきたいと思います。

少し長くなりましたが、そして取り乱しましたが、終わりたいと思います。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。今のご発言は、どのように言葉で申し上げたらいいか難しいのですが、私たちは是非とも具体的な行動をもって、今のご発言に対応していく必要があると思っています。この平和市長会議は、まさに今おっしゃったような目的のために開催されているわ

けです。将来の活動として、平和市長会議キャンペーンの中で、具体的な目標というものが掲げられております。一連の行動、活動によって、核兵器禁止条約を2010年までに実現しようというのが最終的な目的です。そして、2020年までに核兵器を根絶しようということです。

これが、我々が達成しなければいけない目標なわけですが、やはり同時にこれは容易なことではありません。その中で、具体的な提案や要求というものが、この平和市長会議キャンペーンには必要だと思います。そういった意味で、皆様に対して、今の発言に対応するために、具体的な行動というものを念頭に置きながら対応していただきたいと思います。

また、非常に重要な質問が、スティーブ・リーパーさんによって提供されました。スティーブ・リーパーさんの質問に対して、今のご発言がご返答だったと思うのですが、この筋で、このことに関して、またスティーブ・リーパーさんの発言・質問に対して、何かコメントのある方がいらっしゃいましたらどうぞ。

#### 人道問題・軍縮コンサルタント、元地雷禁止国際キャンペーン計画担当役員

スーザン・ウォーカー（アメリカ）：

どうもありがとうございます。今ご発言くださった女性の方にお礼を申し上げたいと思います。スーザン・ウォーカーと申します。私は、人道的な、また地雷廃絶のためのキャンペーンで、この26年間仕事をしてまいりました。核兵器の悲惨さを世界の人々に聞かせるために、今のような発言は非常に重要だと思います。お姉様が亡くなったり、あるいはご自身の健康が害されていることは、それを表す非常に重要なお話だと思います。

私も、地雷禁止国際キャンペーン計画担当役員として、地雷を経験した方々が発言することを経験してまいりましたが、それはたやすいことではありません。したがって、今おっしゃったように感情的になったことに関しては、それはやむを得ないことだと思います。

また、皆様、被爆者の方々のお話というのは、もっともっと声を大にして皆様に聞かせるべきだと思います。私もそうですし、フィリピンの方々もそうだと思うのですが、まだいらっしゃいますね。こういった多くの人たちが、この場に來たのは、やはり広島の人と話をするためです。私たち自身で発言をするというのではなく、被爆者を含めて、広島の方々の発言を聞くために、この地まで來たのだと思います。

完全に健康状態がよいとは限らないにもかかわらず、どこでもいらしてくださいと、そしてその経験を話してくださいということは、非常にありがたいと思います。そして、その被爆者の経験談は非常に有用であり、また、非常に重要であると思います。その被爆者としての経験を共有してくださったこと、また、これからもそれを続けていく意思があるとおっしゃってくださった

ことに非常に感謝申し上げます。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。非常に表現しにくいのですが、心を動かされるご発言をいただきまして、またそれに対するご意見をいただきまして、ありがとうございました。

次の方、どうぞ。

**ヴァル・ドマルヌ県議会議員 シャンタル・ボービック（フランス）：**

フランスのヴァル・ドマルヌ県の県議会議員です。あのような非常に力強い証言を聞いた後、お話しするというのはなかなかしにくいのですが、ここに何人かの市長、それから代表の方がいらっしゃると思いますが、私たちが始めているフランスの自治体の行動というのは、まず、もちろん被爆者の方が皆亡くなってしまふ日が来るかもしれないけれども、私たちは記憶を残しておく、保存しておくことを始めなければいけないと思ったわけです。それは、ノーモア、もう二度と繰り返させないというために必要なのだと考えたわけです。

ノーモアのためには、人々の頭の中で、世界観、それから力、支配に対する考えを変えていかなければいけないと思います。核兵器がなくなれば、新しい世界が実現するのだということを思わなければいけない。人々の社会を前に進めるには、核兵器による道しかないということではないのだということを、人々にわかってもらわなければなりません。

私たちは、できるだけ早く、核兵器を廃絶しなければなりません、それと同時に、貧困などをなくしていかなければなりません。それもやはり、人々に多くの苦しみをもたらすからです。

これは具体的な提案ではないかもしれませんが、私たちの将来はこれにかかっているわけです。ここに来ているフランスの自治体ですが、私たちは今回若い人たちを連れてきました。30人の若者が私の県から来ています。ですから、若い人たちにもこういうことを経験していただくことも非常に重要だと思います。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

そうですね。若い日本の人たちも来ておりますので、意見を聞きたいと思います。手を挙げておられる方がいますね。では、彼女にまず聞きたいと思います。その後、こちらの方にお話を伺っていきます。何でしょう。

**国連国際交流協調委員会 ジョアンナ・ウィンチェスター（アメリカ）：**

こんにちは。国連からまいりました。NGOとして国連で最も古い組織です。特に、コミュニケーションに関するプロジェクトをやっております。

では、スティーブが言ったことに対して、回答したいと思います。その他のポイントについても話したいと思います。私の個人的な意見ですが、世界の平和文化を作るというのは、国連の使命の一つでもあります。それをやるには、やはり想像する必要があります。そして、平和市長会議、その他の世界からの代表の人々が、想像する過程とは一体何なのかというところから、始めるべきだと思います。将来がどのようになるのか、どんなに素晴らしいものになるかもしれない。もしくは、暴力に満ちたものになるかもしれない。こういった想像力を働かせることが最初の第一歩だと思います。

例えば、消費者のお金や地方自治体のお金、また組織や企業など、そういったものが色々な形で悪い影響を出しています。例えば、環境破壊をしているということもあります。例えば、フィリピンの方が、知識は力だとおっしゃいました。ということで、南アフリカに対して、アパルトヘイト制度を撤廃しようというキャンペーンをやりました。南アフリカで、そういった人種差別的なことをやっている組織への支援を撤廃しようということを、我々はやったわけです。資金をなくしたわけです。例えば、個人的な投資家も公共の投資家も、皆が南アフリカの人種差別をやっている組織の資金をなくしたわけです。それによってアパルトヘイトをなくしました。

核兵器に対しても、同じことができると思います。13の大きな企業がこういった軍需産業に貢献をしています。そのうちの 하나가、実は日本の企業です。1,750億ドルという収益を受けております。そして、アメリカでもそういった大きな軍需産業があります。ニューヨークで二人の代表が、ベルギーの地方自治体の代表が、銀行からの預金をなくす、撤退するということを行いました。これは、核兵器に関係しているところから、支援をなくすためだったということです。核兵器の製造に関係するような組織から、ペーパークリップや一枚の紙ですら全く購入しないということでした。

そういった資産を、全て核兵器の会社に流さないで、よい将来を作っていきたいと思います。我々は、組織や個人との間で連携をしながら、そういった動きを作っていくべきだと思います。ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

ありがとうございました。想像力というところでのご提案でした。

今、だんだん時間がなくなってきました。そろそろ終わりの時間を気にしながら話をしなければいけません。あと4人でしょうか、6人。最初に手を挙げた方はずっと待っておられたので、



この人を入れると全員で7人の方が手を挙げています。皆さんに、もっと前に手を挙げた方にもお話をしていただきたかったのですが、すみません、時間的问题がありますので、簡潔に述べてください。今、8時20分です。

では、それぞれ皆さんに発言をお願いしたいと思います。マイクはどこにありますか。そちらでしょうか。では、その後の女性の方から。

**発言者不明：**

こんにちは。広島によろこそ。私は、広島平和記念資料館で、展示物を通して広島を伝えるという活動をしております。そして、多くの世界の方々と出会って、平和的な方々と出会って、核兵器廃絶についてのとても固い握手を交わしております。

今、たくさんの国の方々からのご発言を聞いて、ちょっと勇気がわいております。特に、パークレー市の方からの具体的な発言、そしてフランスの方の「サダコ」を教育の場で取り入れてくださっているということについて、とてもうれしく思います。

今日は、皆さんせっかく広島に来られたので、もうちょっと具体的に自己宣伝といえますか、もっと広島を伝えるために、どんなことを具体的にやっけていこうとしているかということ、一言ずつ今ご発言して下さった市の方々から聞きたいと思いますが、時間はございませんでしょうか。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

とりあえず、質問のために手を挙げて下さった方にご発言いただいて、できるだけ今の質問に対して、海外からの参加者にお答えいただくということにしたいと思います。どうもありがとうございました。

では、次の方。

**ピースデポ 塚田晋一郎（日本）：**

塚田晋一郎といいます。東京から来ました。僕はNGOピースデポのボランティアをしているのですが、広島・長崎講座が開講されている東京の明治学院大学の国際学部の学生です。

いろいろお聞きしたいことがあったのですが、それは今の方がおっしゃったような、世界の各都市での具体的な若者による活動とか、先ほどのドイツの国際法を守る壁キャンペーンなどありますが、具体的にどういうものがあるのかということ、ちょっと学生として聞いて、友達などに伝えたかったのですが、その時間はなさそうなのでそれは我慢します。

一つお願いがあります。ほとんど見学という形だったのですが、僕もNPT再検討会議に参加させていただきました。その時に、一般的に失敗したと言われていて、その後、今僕が思っているNGOとして、強いというか、国際社会に何か影響を与えられるのは、やはり平和市長会議が一番すごいメインとなっているのが現状だと思います。「アボリション2000」のところなどでも、ニューヨークで皆そのように言っていました。

だから、すごく期待されていると思うのですが、秋葉市長が言っている「ヒロシマ・ナガサキプロセス」というものに変えていくというところで、今回何かすごいことが聞けるのではないかと期待して来たという面があったのです。けれども、やはり3か月では、まだなかなか具体的に魔法のようなことは出てこないのだなということがあって、実質的にこれからの計画書が書いてあるのですが、やはり具体的なことは書かれていません。それはこれから考えていくことだと思うのですが、やはり2020年を目指すときに、あと15年ということがあって、僕も今22歳なのですが、15年経つと37歳なので、僕ぐらいの年齢の人が、実際に動かしていくというぐらいまで、先の話なのです。

だから、やはり色々な都市の学生に、広島・長崎講座を受けてもらいたい。僕が受講して、被爆者の方や学者の人など、今まで活動してきた人の話を聞いて、すごくいい影響をもらったのです。そして僕もまた今、広島に来ているので、だから色々な都市の市長さんや代表の方が今いると思うのですが、広島・長崎講座をそれぞれの都市でやっていただきたいというお願いです。お願いします。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。将来のアクションとしての提案をいただきました。先ほど手をお挙げになった方に限らせていただかないと、おそらくこれからどんどん手が挙がってきて、きりがなくなってしまうのではないかと思いますので、よろしく願いいたします。では、どうぞ。

**海洋動物学研究所 荒川好満（日本）：**

海洋動物学研究所の荒川と申します。原爆が落ちて半世紀以上経っても、かえってNPTなどは、国連本部で昼休みのガラガラの時に演説をさせられるというような、世界的に原爆禁止が極めて冷たい環境に置かれています。私は、これは広島市民の常識と、いわゆるグローバルな世界の常識というものに、乖離があると思うのです。この辺をよく見つめて、これから改善しないと、いつまでたっても核はなくなりません。

その一つとして、秋葉市長が十数年前に「アキバ・プロジェクト」を立ち上げられて、地元の新聞ばかりではなく、「ニューヨーク・タイムズ」など、ああいったグローバルな影響力を持つ新聞社の記者を、広島に8月6日に呼ばれてアピールされた。こういったやり方が、他の面でも必要ではないでしょうか。

もう一つは、被爆者団体が四分五裂しています。五つに分かれています。原水禁とか原水協とか共産党系とか社民党系とか、こういうものが、8月6日に、社民党系は北を向き、共産党系は南を向き、原水禁は東を向き、西を向きして式典をやったら、外国から来た原爆反対の賛同者たちは皆、これは本物ではないなど、広島の原爆反対の運動というのは儀式でやっているのだなどしか受け取らないと思います。その辺を自覚して、小異を捨てて大同につくという大きな気持ちで、一本にまとまってぶつかっていく、これが大事だろうと思います。

いろいろ言いたいことはありますが、あとの方がいらっしゃるので、これぐらいにします。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。私も個人的に、今のご発言に同感です。

**発言者不明：**

私は、広島の市民でも日本国民でもありません。実は60年前のあの日、8月6日8時15分、この広島に10万人に上るコリアンが被爆しました。なぜあの日、彼らが広島にいたのか。私は何に所属しているかと問われると、「私は私人です」という答えしか出せません。なぜならば、このコリアン被爆の被害について、日本の国は60年の今日まで、その被害の実態を明らかにせず、また南の韓国、それから核開発を進めている北朝鮮にも、数千人の被爆者が広島から帰っております。韓国の政府は1965年、日本との韓日協定で、被爆者を完全に切り捨てました。植民地支配に対する清算が、たった5ドルの独立祝い金なるものにすり替えられたのです。つまり、日本の政府は、日本が朝鮮に対して36年間、過酷な植民地支配をしてきました。その植民地支配に対して、責任を一切取ろうともしておりません。

実は今日、ここに、広島に強制動員されてきました韓国の被爆者の一人で、既に亡くなっておりますシン・ヨンス（辛泳洙）さんの写真を持ってまいりました。彼は広島で被爆しました。命からがら故郷に帰りましたが、両親が「おばけが来た。おまえは俺の息子じゃない」、追い返そうとしました。彼は何回か整形手術を受けて、このような顔になりましたが、当時の彼は、目も見えず、そして声も出ず、耳も両耳溶けて、鼻も口もゆがんで、それは人と思える形相ではなかったのです。ですから、両親が「化け物だ」と追い返そうとしました。彼は、切羽詰って、「私はあ

なたの息子です。私の名前はシン・ヨンスです」と紙に書いて示しました。それで初めて父親は、変わり果てたこの息子が、愛する自分の息子であるということに認識したのです。

つまり、日本のこの三菱や、それから先ほど出ましたが、中国大陸への侵略がエスカレートしていくにつれて、この西日本に設けられた大本営は、中国大陸向けの輸送基地になり、軍需産業が一気に4倍に膨れ上がってきます。圧倒的な労働力を補うために、朝鮮の若者たちを強制連行してきました。そして三菱や東洋工業などに強制労働を強いたのです。

中には、数百人の女子挺身隊、女子学徒隊が朝鮮半島から連行されてきております。実は、長崎の三菱軍需工場にも、300人の女子学生が連行されてきたことが目撃されています。植民地下、私たちは自分の国の言葉話すことは禁じられておりました。自分の名前さえ日本風に変えられ、そして朝鮮人としての身分を完全に奪われてしまったのです。そして強制されたのは、「天皇陛下のために命を捧げよ」という公民化政策でした。

つまり、被爆者は数万人に上る、生き残ったピカに遭ったわが同胞たちは、「我々は、ピカに遭う前に、日本の植民地政策によって魂を殺されていた。朝鮮民族として生きることを奪われていたのだ」。そうです。彼らは、人間としての、あるいはコリアン民族としての身分を、完全に日本の植民地政策によって奪われていたのです。ですから、戦後、日本は唯一の被爆国日本として、この未曾有の核の惨禍を受けた人類最初の被害国として、アジア侵略に対するかなりの責任を完全に口をつぐんで、核の被害者として、日本の反核平和運動もスタートしたのです。

私たちコリアン被爆者は、いまだに存在を奪われ、植民地化されていると言っても過言ではありません。もはや韓国に帰国した被爆者の90%が死んでおります。原爆の治療からも、それから生活の一切の援助からも、この半世紀、断ち切られてきたのです。

70になった、三菱に強制労働を強いられて生き残った人たちが44人、1995年、初めて裁判に立ち上がりました。そして、我々を強制連行し、強制労働を強い、そのあげくに被爆を余儀なくした日本の国家の責任を問う、賠償請求の裁判を提訴しました。この裁判は10年、いまだに決着がついておりません。

続いて、西日本の大本営に軍人として連行されてきたカク・キフン（郭貴勲）さんが、被爆者援護法を我々韓国人被爆者にも適用せよという裁判を起こしました。これは、2年前に勝訴しました。しかし、国家賠償を日本の国家に求めた裁判は10年、日本の政府は認めようとしておりません。原告たちは次々に80歳を超え、亡くなっていっております。つまり、コリアン被爆者は、いまだに日本の国家から、植民地としてしか扱われておりません。人間としての存在の回復を奪われたままです。

私は、日本が本当に平和の道を歩くということは、過去の植民地支配を自覚し、そして反省す

ること、このことによって、被爆したコリアンとの和解は成立し、そして、未来に向かっての共生が見出せると思います。

しかし、いまだに日本の政府・国家は、コリアン被爆についての被害の全容を明確にしておりません。そして今日、私はここに座りながら、なかなか発言が与えられないことで、非常に悲しみました。この国際会議でも、日本の原水禁運動でも、わがコリアン被爆の存在はいまだに植民地であり、その存在をいまだに回復し得ていないということです。

是非、フランスやアメリカやイタリアから来たかたがたに訴えます。この広島に、もう一つの広島があったということです。私は、調査の結果を1冊の本にまとめました。その証言集と、それからドキュメンタリーを作りました。「もう一つのヒロシマ」。山形の国際映画祭に特別招請されました。そのビデオを持ってまいりました。そして、今、コリアン写真展をこの近くの会場でやっております。ぜひ皆様、もう一つの広島、コリアン被爆について、これをこの60年の広島で自分のものにしていただき、そして、お国に帰られたら、伝えていただきたいと思います。どうも貴重なお時間、ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。言うまでもないことですが、今挙げられた点というのは、現実の問題です。そして、我々は、これにきちんと直面しなければいけません。きちんとこれに向き合わなければいけません。皆さん、ご存じだと思いますが、このような問題があるからこそ、日本は今、この時点でも困難な状況にあるのです。すなわち、中国や韓国、北朝鮮との関係が思わしくないのは、この問題のせいなのです。

また、アメリカでも、政府とアメリカ国民の間では大きなギャップがあります。また、十分に知識があるわけではありませんが、皆さんご存じだと思います。広島を見ると、色々な活動がなされております。そして、色々な人が、こういった平和活動に参画しております。単に核兵器だけではなく、私の友達や、また私の組織のメンバーたちもまた、同じようにそういった平和の活動に参加をしており、また、韓国やコリアンの方々と一緒にやっております。こういった取り組みが人々のレベルでなされること、これはしかし、まだ十分なレベルには来ておりません。日本の政府というのは、まだ歴史に対して、問題のある態度を取り続けております。

1点だけ、発言していただくのが最後のほうになってしまいましたが、それは、前のほうに座っていらっしやったから、ご覧になれなかったかもしれないですが、後ろのほうに、もう本当に最初のほうから、やはり手を挙げていらっしやった方がいたので、全く他意はないので、そのことは是非ご理解いただきたいと思います。どうもありがとうございました。

それで、もう既に決められた時間を過ぎております。ただ、一番初めに手を挙げてくださった方に発言をお願いしたいと思います。

**発言者不明：**

先ほどは、どうも迷惑をかけてすみませんでした。ただ、願わくは、広島内外の人たちがもっと自由に発言できるような、そういう場と時間を設けていただきたいと思います。ただ、それだけを申し上げまして、今回は終わりにしたいと思います。大変ありがとうございました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうでしょうか。何かお答えというか、コメントはありますか。これで終わりですか。いいですか。もう終わりますか。

**発言者不明：**

すみません。私はフランスのある都市の市長ですが、今日お聞きした多くのお話は、私たちにも関係があるのです。私たち自身も、皆さん、この恐ろしい体験をされた皆さんが必要です。非常に辛い体験だったと思いますが、ぜひ皆さんに証言をし続けてほしいわけです。皆さんが生きたことを証言してください。

この平和市長会議は、平和が必要であるということは確信していますが、しかしながら、私たちの間にも、色々な違いがあります。意見の違いもありますし、どのように行動するかということについての意見も違います。しかしながら、私たちがやっている議論で、核兵器を廃絶するだけではなく、他の色々な問題も解決していくことができるかもしれません。

世界は色々な問題を抱えております。不平等の問題、不平等な開発というものがあります。それから兵器の問題がありますが、しかし、私たちは行動を諦めてはいけません。私たちはすぐに核兵器廃絶のために、軍縮のために行動をしなければいけないわけです。不拡散のためではありません。軍縮のためです。

というのは、こういう議論はよくされているのです。いくつかの発言の中でこういう声が聞かれました。昨日ですが、資料館の出口で、フランス語を話す若い女性だったのですが、私がフランス人だとわかって、フランス語を練習しようとして、私に次のように話しかけてきました。「広島原爆は8時15分に爆発しました。8月6日の8時15分でした。今、人間の歴史は、今私たちはどこにいるのですか」。私は想像ができなかったわけです。私は、もう1回、3回目の核爆発が起こるということは想像できないのですが、しかしながら、私はこのように言いました。「長

崎と広島で原爆が爆発してから、どこにいても、どういうところにあっても、新しい第3の被爆が起こるという危険があるわけです。私たちはこのようなことを耐えることはできません。今から行動しなければなりません。そして、核兵器を全て廃絶していかねばなりません」。

先ほど、市長がこれから広島に来て何をするのかと言われました。確かにNPT再検討会議は失敗してしまいました。しかしながら、この条約は残っています。そして、その条約に基づく、調印国の義務が残っています。核兵器保有国はこの義務を果たしていません。ですから、私たちは、新しい核兵器を普及させるのを防ぐということももちろん大事ですが、アメリカが核軍拡競争を再びスタートさせようとするのも食い止めなければなりません。

しかし、一言言いたいのですが、市民がいない市長であれば、私たちはあまり役に立たないと思います。市長は何の役に立つのでしょうか。アメリカ、フランス、イギリス、ロシア、そしてその他核保有国の政府、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮、そういう政府に対して、世界の人々、どこにいても、どの都市でも、市民と一緒に、人民の圧力をかけていかねばなりません。そして、そういう政府が、もはや核兵器を開発することができず、そしてそれを減らしていかざるを得ないような、圧力をかけていかねばなりません。これこそが、この「2020ビジョン」の目標だと思います。私たちは、この目標に忠実であらなければなりません。

ちょっと長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

#### **チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

非常に決意のある、また力強いご発言をありがとうございました。また、若い青年によってなされた質問に対するご返答でもあったと思います。彼の質問に、他の海外の方々からもご発言いただきたいのですが、残念ながら時間がありません。したがって、他にも手を挙げていらした方がいましたが、では、このご発言を最後とさせていただきたいと思います。

#### **発言者不明：**

広島で被爆しました被爆者の一人です。今日、大変期待をしてここに来ました。私の言いたいのは、この日本では、今一番何か、北朝鮮の核問題なのです。この点について詳しく申し上げる時間がないので、平和市長会議に参加されている市長さんその他の代表の方が、どこまでご存じなのか。ただ、今、北朝鮮が言っているのは、核兵器は排除しよう。しかし、私が思うのは新聞記事ですが、核の平和利用については何とか認められないかというところまで、今、会議が行なわれているのです。

もう一方の拉致問題があります。今日は時間がないので言いません。この核問題について、北

朝鮮も日本も今切羽詰っている。この6か国会議で、日本はもうほとんど相手にされていないのです。そういう中で、日本が今やっている、そして、その意見を見て日本を見ると、結局は北朝鮮に、核開発は平和利用のためだと言いながら、日本では数知れないほど原子力発電所があるのです。そして、プルトニウムをたくさん保有しているのです。今、造ろうと思えば、日本はすぐ核兵器ができるのです。日本の国会議員の中にも今、核武装をするのだというような、国内ではそういうところまで来ているのです。

ですから、こういった核廃絶ということで考えてみれば、NPT再検討会議がご存じのようにこういう決裂をしました。平和市長会議が大変大事になると思います。ですから、是非ともこういう問題を、多くの国々の人に知っていただいて、日本も絵空事ではないのだよと、本当に平和なのだよということではなく、現状としてそういう心配があるということ、是非とも世界の代表者の人たちに知ってもらいたいのです。それだけです。どうも時間を取りました。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

非常に重要な点をご指摘いただきまして、ありがとうございます。同じような問題について、私も意識しております。人々は、アメリカのダブル・スタンダードということについておっしゃいますが、日本においても、核政策に関してダブル・スタンダードがあると思います。

また、日本は、いわゆる自衛隊をアメリカのために、イラクに派遣したという事実もあるわけです。したがって、危険な状況にもあることを認識しなければなりません。そして、日本の政府の問題にも、焦点を当てていかなければなりません。国際社会にアピールする場合、核兵器廃絶のためにアピールするために、私たちがもっと意識しなければいけない諸問題があると思います。

**人道問題・軍縮コンサルタント、元地雷禁止国際キャンペーン計画担当役員**

**スーザン・ウォーカー（アメリカ）：**

申し訳ないのですが、後ろの男性の方に申し上げたいのですが、全く同感であるということです。もっと時間があれば良かったと思います。明日の朝、自由時間がありますね。式典の後のセッションが始まる前に自由時間があると思います。私自身、直接、核問題の運動の参加者ではありませんが、私や、また平和市長会議のメンバーでも、関心を持っている人たちがいると思いますので、その時間を利用して、皆様とお話をさせていただきたいと思います。今日せっかくお集まりいただいたのに、発言する時間がなかった方もいらっしゃると思いますので、ぜひその時間を使って交流したいと思います。



**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。

この対話集会をまとめることはできませんけれども、私は多くの国際会議に参加してまいりました。私の専門分野、哲学の分野の国際会議のみならず、平和運動の国際会議に参加してまいりました。そして、こういった会議に参加する度に私は思うのですが、こういった会議が最終点ではなく、出発点であると思います。こういった国際会議を出発点として、たくさんの発展を行うことができると思います。そして、私たち自身が予期せぬような発展を見ることがあると思います。

ということで終えたいと思うのですが、たくさん述べられたいことがあったと思います。そして、私の司会の拙いところもあったと思いますけれども、できるだけ多くの方々に対話していただきたいと思い、努力をいたしました。十分でなかった点に関しては、お詫び申し上げたいと思います。

**バークレー市随員 木村修（日本）：**

すみません、遅い時間で、短くします。大阪からまいりました木村と申します。私は、先ほど発言されたバークレーのステューブ・フリードキン氏の友人として同行してまいりました。今まで出ていない側面を、一つだけ発言させていただきたいと思います。

平和と核廃絶の問題は、民主主義の問題と一体だということを、私は一番言いたいと思います。バークレー市は、非核条例を採択しました。アフガン爆撃に反対しました。イラク開戦に反対しました。愛国法に対して、二度の反対決議を上げました。バークレー市上空の核飛行物体の飛行を禁止する条例を採択しました。現在は、イラクに派兵しているカリフォルニア州兵を撤退させようという決議を論議しているところです。15分の7で、1票足りないそうです。

これが実現されているのは、バークレー市の市政が全て市民参加が貫かれているからです。市議会は、夜7時から開かれ、必ず市民が発言する。市に42の委員会があり、42の委員会に全ての市民が参加する。その民主主義の基礎の上に、反戦平和があるということを、私は非常にショックを受けて帰りました。

そこから、日本の私の住む町、あるいは日本の政治制度を考えると、民主主義が非常に制約されている。私は、この平和の問題で、平和市長会議の方々には是非要望したいのは、それぞれの自治体の中で、市民の政治参加のプロセスをどう作っているのかという問題と一体に、今後、検討して発展させていただきたいということが要望です。

**チェアパーソン（神戸大学教授 嘉指信雄）：**

どうもありがとうございました。もっともっと、たくさん発言なされたい方があると思います。そして、もっともっと時間があればよかったです。今朝、総会がありました。そして、その総会では全くディスカッションの時間がありませんでした。したがって、それに比べれば、私たちは1時間半も、色々な意見の交流を行うことができました。もちろん十分ではなかったのですが、私も最善を尽くし、十分な交流を図るべく努力をさせていただきました。皆様、遅くまでご参加いただきまして、最後までおつきあいいただきまして、ありがとうございました。

それでは、また将来のために、これからも協力してまいりましょう。